ようこそ
私たちの
蓬田村へ

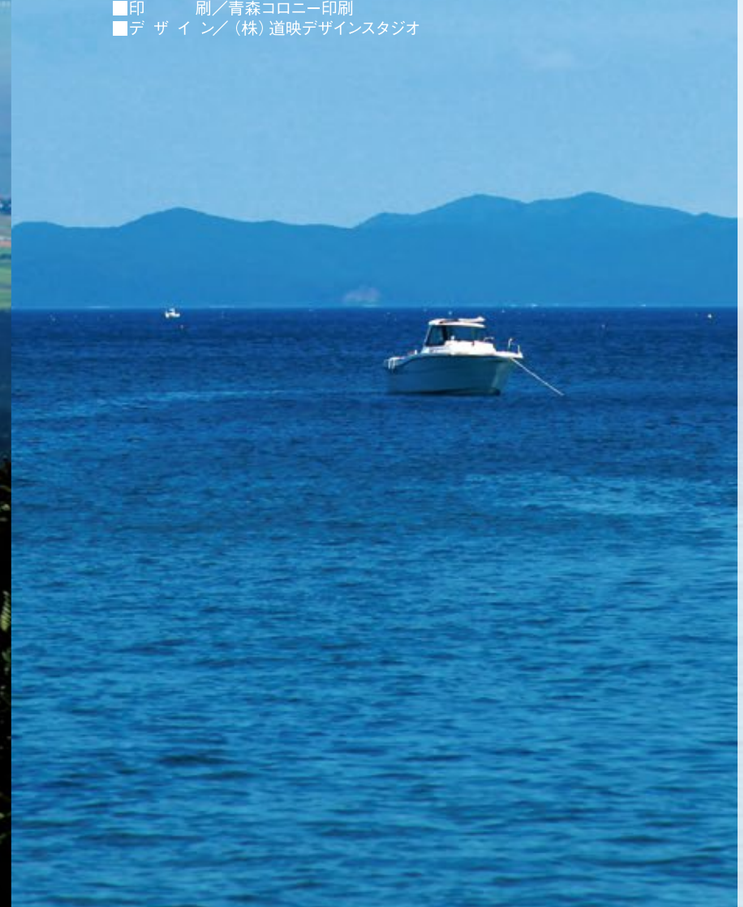
蓬田村

2016 村勢要覧

蓬田村 2016 村勢要覧

■発行／平成28年4月1日

■蓬田村役場／青森県東津軽郡蓬田村大字蓬田字汐越1番地3
TEL.（0174）27-2111 FAX.（0174）27-3255
■編　　集／蓬田村役場（総務課）
■印　　刷／青森コロニー印刷
■デ ザ イ ン／（株）道映デザインスタジオ



蓬田村の唄

◆蓬田音頭

作詞 吉田桃里　作曲 清野　健

一、山は紫　海面はのどか
村は米どこ　うたどころ
わいた唄コは　蓬田音頭
音頭とるのは　だれじゃやら

二、津軽むすめを　みるならおいで
笑顔見たけりゃ　またおいで
三度きたなら　音頭のてぶり
踊るそぶりの　しおらしさ

三、沖の白帆を　松原ごしに
憩う親子の　語りぐさ
村中揃って　心の意気を
むすぶ玉松　よい眺め

四、外が浜辺は　大舟小舟
植える魚介も　世の流れ
櫓べそ鳴らして　明治は遠い
夢はまぼろし　魚の波

五、大館殿さん　残したものに
これはお手植え　福寿草
小館みるとて　背のびの松が
みたは新興　村の幸

六、野良でエンジン　こだまが呼んで
鶏がはばたく　乳牛がよぶ
野菜畑に照る　日が昇りゃ
語るりんごは　紅の色

七、月のよい夜の　笠松さまは
池が鏡の　化粧なおし
誰のためとて　汗かき観音
みんな世のため　村のため

八、渡る世間は　かずかずあれど
蓬田恋しや　生まれどこ
唄う心に　うるおいあれば
踊る音頭も　花模様

◆蓬田小唄

作詞 前田はつえ　作曲 小倉尚継

一、偏東風（やませ）明けたよ　朝日が昇りゃ
東の海に　大漁船
西の田んぼは　花ざかり
シャンシャン手拍子　輪をつくりゃ
蓬田笑顔の　花ざかり

二、松の緑の　変わらぬ丘は
昔を語る　玉松台
磯じゃ波間に　子がはねる
シャンシャン手拍子　輪をつくりゃ
明日（あした）にはばたく　子がはねる

三、今日の汗をば　温泉（いでゆ）で流し
今宵楽しく　見る夢は
銀輪黄金（ぎんりんこがね）の宝蔵
シャンシャン手拍子　輪をつくりゃ
働くこの手に　宝蔵

ようこそ私たちの蓬田村へ

山あり、海あり。四季折々の豊かさを大切に

津軽半島の陸奥湾沿岸に位置する蓬田村。濃い緑に覆われた山並みの裾野には整備された美しい田園が広がり、立ち並ぶ家々の向こうには青くきらめく穏やかな海が見渡せます。

山里の落ち着きと、海辺の開放感。初めて訪れた人もほっとする懐かしさや温もり。誰もが心に思い描く『故郷の原風景』がここにあります。

海岸沿いの一本道に向き合って連なる家々は、肩を寄せ合い、手を携えて暮らして来た村民の姿そのもの。ヤマセによる冷害や不漁などの苦境をともに乗り越え、支え合って来た絆の証です。

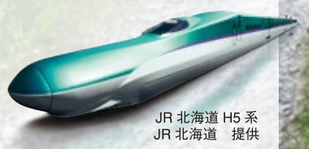
時に厳しい自然に脅かされつつも、四季折々の恵みをいただき、自然と共生してきた半農半漁の村。先人達が守り、育んできた豊かな資源や美しい景観を次世代に引き継ぎ、より快適な村暮らしを実現していきましょう。

〈目　次〉

3 村長挨拶　村民憲章
5 蓬田村の自然と観光
7 玉松園カントリーパーク
9 蓬田村の歴史と文化
11 多彩なイベント 笑顔とともに
12 インタビュー「ここに生きる」蓬田村の産業
13 農業／森 遼太郎さん
14 漁業／大宮 俊彦さん
15 トマト農家／石田 和則さん
16 ㈱蓬田紳装／今 順司さん
17 トマト加工／藤田 かち子さん
18 村の駅 よもっと／武井 大介さん
19 蓬田村の宝もの 蓬田村の名産品
20 未来へ向かって 蓬田村の基本構想
〈豊かな自然と共生する活力みなぎる村〉
21 緑豊かな快適な村づくり
23 健やかでふれあいのある村づくり
25 はつらつとした創造性豊かな人づくり
27 活力ある産業の村づくり
29 行政・議会

念願の北海道新幹線も開通しました。蓬田村へお立ち寄りください。

蓬田村は、青森市に隣接しており、市街地までは約20kmと近距離。村内を縦断する国道280号やJR津軽線を利用すれば、東北新幹線のJR新青森駅や北海道新幹線のJR奥津軽いまべつ駅へのアクセスも簡単です。青森から北海道へも新青森駅から新函館北斗駅まで最速で約1時間となり、北海道も身近になりました。



JR 北海道 H5 系
JR 北海道　提供

ようこそ私たちの蓬田村へ

青森県東津軽郡蓬田村長
久慈 修一

私たちの蓬田村は、津軽半島の陸奥湾沿いにあり、南は県都青森市と北は外ヶ浜町と接しています。明治22年の町村制施行以来合併をしたことがなく、平成30年には村制施行130周年を迎えます。村内には遺跡も多く、古くから居住に適した土地柄であることが分かります。

交通アクセスは、青森市からJR津軽線で20分、国道280号線を車で30分、また東北新幹線新青森駅から車で20分と大変近い位置にあります。

稲作中心の農業村ですが、桃太郎トマトの村として知られています。最近はミニトマト「ベビー・ベビー」の生産にも力を入れており、ブランド化を目指しています。また自然豊かで山菜などの山の幸、ホタテ貝などの海の幸にも恵まれた日本のふるさとのような村です。

平成28年3月26日には北海道新幹線が開業し、奥津軽いまべつ駅を拠点とした広域観光ルートが開設されます。交流人口が増え、地域の活性化が期待されます。どうぞ一度蓬田村においで下さい。

蓬田村村民憲章

（昭和55年7月1日告示第8号）

私たちは、きびしい自然にうちかった祖先の不屈の精神を受けつぎ、蓬田村の村民であることに誇りをもち、明るく住みよい村づくりのため、すすんでこの憲章をかかげ実践いたします。

一　なんでも話しあい、たがいに助けあう明るい村をつくりましょう

一　げんきで働き、楽しい家庭とゆたかな村をつくりましょう

一　こころから郷土を愛しすすんですみよい村をつくりましょう

森の中はブナの原生林が広がる

蓬田三山のひとつ、袴腰岳山頂。初心者は村の駅よもっとで配布している「蓬田三山・黒滝山歩きガイドマップ」があると便利

山と海そして川

自然に寄り添った開発や保全で豊かさの質を高めます

蓬田村の総面積の約８割は山林です。村の西部に津軽半島の脊梁をなす中山山脈が走り、標高５００～７００ｍ級の山々が連なっています。中でも、袴腰岳（６２７ｍ）・赤倉岳（５６３ｍ）・大倉岳（６７７ｍ）は『蓬田三山』と呼ばれる登山のメッカ。ヒバやブナの原生林の中に登山道が整備されています。

三山の山頂からは、眼下に、北に津軽海峡と北海道、東に陸奥湾と下北半島、西に十三湖と日本海、南に八甲田と津軽平野が広がり、３６０度の大パノラマを堪能できます。

途中の大倉大滝（７ｍ）はリフレッシュにぴったり。また、登山はきついという人には、黒滝（11ｍ）への遊歩道もあり、四季折々の山野草の観賞や山菜採り、渓流釣り、キノコ採りをしながらのトレッキングが楽しめます。

蓬田川を始めとする清冽な川の水は、田畑を潤し、山から海へと養分を運ぶ重要な資源でもあります。

陸奥湾は潮流が緩やかで閉鎖性の高い水域。山、森、川とのつながりや循環を考え、美しさと豊かさを守っていかなければなりません。

人と自然との共生をめざします。

ゆるやかに流れる広瀬川、船着き場もある

広瀬川の上流、川の中を遡ると黒滝へぬける

海水浴の様子

海水浴場

ようこそ
私たちの
蓬田村へ

蓬田村の自然と観光

**美しい景観を守り、
生態系に配慮した環境づくりを**

黒滝

古木・玉松

北緯41°のレクリエーション施設

玉松園カントリーパーク

豊かな自然を満喫しつつ、集い、学び、寛ぎ、遊べる交流エリア

爽やかな潮風を感じ、明るい日射しに満ちたレクリエーション基地「玉松園カントリーパーク」は、蓬田村の豊かな自然を活用し、その魅力を満喫できる緑地公園です。

陸奥湾を見下ろす高台・玉松台からJR津軽線の線路をはさんで海岸まで、各種施設や観光名所が集まり、訪れた人が思い思いの時間を楽しめる環境が整っています。

玉松台は、江戸時代に青森港や油川港へ向かう船が灯台代わりの目印にしたと伝えられる『玉松』がいまも残る場所。立ち並ぶ黒松の中で一際目を引く、太い枝が輪状になった不思議な樹形の古木・玉松（樹齢300年以上）がこの公園のシンボルです。

パーク内の高台には、多目的集会施設「ふるさと総合センター」、宴会場を備えた「ふれあいセンターよもぎ温泉」、野球場やテニスコートが整備された「玉松台スポーツガーデン」があり、海岸沿いには、美しい景観の「玉松海水浴場」、「たままつ海の情報館」、物産館「マルシェよもぎた」があって、村内外から訪れる人々でにぎわっています。

健康増進、リラックス、美味探しと、さまざまな目的でのんびりと楽しめるエリアです。

日露戦争の戦没者の墓と忠魂碑。戦死しても魂だけは故郷に葬られたいと願う出征兵士が決死の覚悟で建てたもの。

■玉松園カントリーパーク概要

村民憲章に掲げた「明るく住みよい村づくり」の一環として、『ふれあい』の場を提供し、『健康』の増進をはかる目的で整備された海洋性レクリエーション基地。高台から海岸に向かって広がるパークは、開放的で明るく、健全なイメージに満ちています。村民はもちろん、村外からの利用客も多く、蓬田村の観光スポットとして認知度が高まっています。

魅力ある観光

●ふるさと総合センター

保健・福祉・公民館の機能を持つ総合センター。各種検診を行う多目的ルームや250人収容のホール・調理室・パソコン実習室・図書室・会議室などがあります。平成12年の完成以来、ホールは講演会や各種大会・冠婚葬祭などに利用されてきました。

オープンスペースの図書館は利用しやすく好評です。また、会議室や調理室では、村民主催の各種研修や料理教室、イベントなどが開催され、村民の交流の場として活用されています。

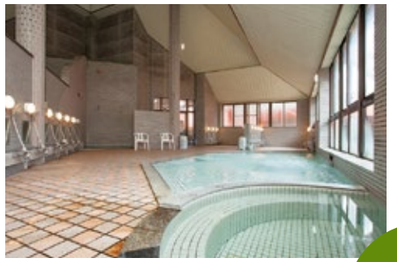
ロビー

図書館

●ふれあいセンターよもぎ温泉

140人収容の大浴場と季節のフルーツやハーブを使ったイベント湯・打たせ湯・サウナを備えた温泉施設。泉質はナトリウム塩化物強塩泉で、切り傷・やけど・慢性皮膚病などに効能があります。

ゆったり寛げる休憩スペースが快適で、村外から訪れるリピーターも多い人気の温泉。宴会場を利用した体操教室や各種イベントも増えています。


大浴場

大広間（有料）

●たままつ海の情報館

玉松海水浴場内に、平成12年に誕生した海の学習施設。1階は玉松海岸の模型や説明パネルが設置された学習ゾーン、2階は美しい陸奥湾の眺望を楽しめる展望ゾーンになっています。

また、ここは、海難事故が起こった場合の拠点施設としての機能も備えています。

学習ゾーン

ロビー

●玉松台スポーツガーデン

野球場・テニスコート・ゲートボール場を整備。野球場はホームベースからスタンドまでの距離が両翼とも97メートルにも及ぶ広さがあり、高校野球の練習や大会にもよく利用されています。

野球場

●玉松海水浴場

遠浅で透明度の高い海水浴場で、キャンプ利用者も多く、シャワールームを備えた清潔なトイレが整備されています。海開きは通常7月下旬頃で、夏の村のメインイベント「玉松海まつり」の会場にもなっています。

キャンプスペース

縄文の古から連綿と続く
村の歴史に新たな一ページを

蓬田村の歴史と文化

受け継ぎ、守り伝える一方で、新たな伝統を育む取り組み――玉松太鼓

町村制が施行された明治22年、後潟村から中沢・長科・阿弥陀川・蓬田・郷沢の5集落を分離し、蟹田村から広瀬・瀬辺地の2集落を分離して、蓬田村が誕生しました。

その村制施行から100周年を迎えた平成元年に生まれた新しい創作芸能が、村の象徴である老松「玉松」から命名された玉松太鼓です。2尺1寸の太鼓1台、1尺4寸の太鼓6台の計7台の太鼓で編成されています。

メンバーは揃いの衣装に身を包み『小舘野（こだての）』、『玉松（たまつ）』など、村や村のシンボルをイメージして作られた曲を演奏します。例えば『玉松』は、その名のとおり村の象徴である樹齢380年以上の老松をイメージした曲です。昔を語り、いまも変わらず平穏な村、そして未来に向けて玉松の魂と明るく平和な世界を表しています。

一時練習場所を失い、途絶えましたが、平成12年6月に保存会を設立し、村の伝統芸能として保存することになりました。現在は総勢15名で活動しており、村の行事である海祭りや村民祭での演奏や、村外におけるイベントへの参加など村の伝統芸能としての保存・発展を目標に日々活動しております。

夏の工芸学校のようす

●蓬田村文化伝承館

郷土の歴史を後世に伝えるべく、旧広瀬小学校校舎（改築当時は旧幼稚園校舎）を改築し、平成13年に開館。

農業・漁業・林業の現場で使われてきたさまざまな道具や民具を収蔵しています。職人が製作した精巧な道具ばかりでなく、身近な材料で手づくりされた民具も、産業や民芸の歴史を知るうえで貴重な資料です。

講堂は、郷土芸能の練習会場やスポーツ活動の場として、校庭は交流広場として子ども達に開放されています。

平成22年から27年の夏季には『夏の工芸学校』というイベントが開催されました。

●小館遺跡

擦文土器

阿弥陀川上流右岸の台状遺跡。昭和46年に発掘調査が行われ、多数の擦文土器・土師器・鉄片・鉄滓・炭化したヒバ材などが出土し、竪穴住居跡や粘土でつくられたカマド跡も発見されました。擦文土器は、北海道在来の文化に東北経由で北上した大和の文化が接して生まれたもの。この擦文土器が大量に出土したことで、古代におけるアイヌとの交流や、蝦夷との関連が注目されるきっかけとなりました。

●蓬田城址（大館）

小館遺跡の北にある蓬田八幡宮。ここが蓬田城址です。南北朝時代の豪族の居館だったと伝えられますが、誰がいつ建てたかは不明です。天正13年（1585年）に城主・蓬田越前が南部に去り、廃城となったとされます。昭和50年、発掘調査が行われ、縄文時代の土器・石器・土師器・恵寿器・擦文土器・中国産の白磁と青磁や、鋤、短刀、鉈などの鉄製品が発掘されました。

受け継がれる伝統

●龍澤山正法院

慶長18年（1613年）、長勝寺（弘前）の14世聖岩雲祝和尚によって開かれた曹洞宗の寺院。寛文2年（1662年）に現在地に移転し、松前公の参勤交代の休憩所として航海の安全を祈願したと伝えられます。寺宝は微笑仏で知られる円空作の観世音菩薩座像（木彫仏像）。山門で出迎えるのは、奈良・東大寺の仁王尊像に倣い、青森市後潟の船大工・工藤源蔵が4年の歳月をかけて昭和5年に完成させた2体の仁王尊像です。（県重宝）

円空作の観世音菩薩座像

本堂

●古城の沼

戦没者の墓や忠魂碑もあります

村のシンボル・玉松のある玉松台は、陸奥湾の眺めが楽しめる、黒松に囲まれた高台の緑地公園です。園内には、整備された古城の沼があり、水辺を散策しながらゆったり過ごせる憩いの場になっています。沼の近くにある日露戦争の戦没者の墓や忠魂碑は出征兵士が死を覚悟して建てたもの。感謝を込めてお参りしましょう。

●権現舞

権現舞とは、正月に獅子舞の一団が各戸を回り、獅子頭によって五穀豊穣・無病息災・火伏せなどを祈祷する神楽で、山伏神楽とも呼ばれます。主に、青森や岩手の風習とされます。蓬田村では、50年以上前から行われており、長科地区の長科権現様保存会、蓬田地区の蓬田村権現様保存会等が『権現様』の保存・継承に努めています。

多彩なイベント
笑顔とともに

村では老若男女が集うさまざまなイベントが開催されます。

中でも、最もにぎわうのは、毎年8月の第1日曜日に玉松海水浴場で開催される「玉松海まつり」。誰でも参加可能なこの海まつりは、豪華賞品獲得をかけた砂浜での宝探し、トマトの早食いやトマトジュースの早飲み大会、玉松太鼓保存会や蓬田ねぶた囃子愛好会の演奏、宗家石川流の手踊りなど、盛り沢山のスケジュールが朝から晩までびっしり。捕れたてのホタテの貝焼きなど、村ならではの美味を堪能しながら楽しめます。

7月は県ビーチバレーフェスティバルとして開催される「よもぎた玉松ビーチバレー大会」、8月は「蓬田村ねぶた運行」、9月は「よもぎた村民祭」、12月は「子ども会餅つき大会」、1月は「村民スキー教室」「新春書き初め大会」「蓬田村トランプ大会」など、各シーズン、家族で参加して楽しめるイベントが目白押しです。

ようこそ
私たちの
蓬田村へ

ここに生きる
蓬田村の産業

しっかりと一歩ずつ
蓬田村は発展していきます

農業（稲作）

森　遼太郎さん

（27歳）

いい米をたくさん収穫すること
それが父子の最大の目標です

米作りの先輩である父・秀夫さんと二人三脚で農業生産法人『百姓屋』を運営する森さん。

自ら育てた米を自ら精米し、付加価値をつけて販売するため、10年前に森さんが法人化。その根底には、たとえ家族であっても、労働に対する賃金をきちんと払いたいという思いがあった。

精米は人を雇ってお願いしているが、その間自分達は現場の作業に集中できる。人件費を払ってもそのほうが効率がいい、とも。

以来、豪放磊落（ごうほうらいらく）な父と、慎重派の息子という対照的な二人が、双方の持ち味を生かしながら、米作りと販売を行っている。

飲食店やグループホームに直接納品している米の評判は上々だ。県外の試食会でも、「美味しいお米ですね」と言われることが多い。品種は『まっしぐら』。大倉岳、赤倉岳のブナやヒバの原生林から流れてくる栄養豊富な水で育てた米である。

「山から流れてくる水が豊富にあり、生活排水が混じらない点では恵まれているけれど、ヤマセもあるし、いい米が作れる条件が揃っている土地ではないんです」

だから、まだ試行錯誤の最中だと謙虚な森さん。「ただ、米のおいしさって、評価の基準が曖昧ですよね」と、苦笑する。

百姓屋の米は2年に1度、東京の分析センターで残留農薬の検査を行う。毎回、230項目のすべてに基準値以下のお墨付きだ。また、食味検査でも高い食味値を示しており、安全面でも味の面でも客観的な評価は高い。それでも森さんは現状に満足しない。

父子が追求しているのは「いい米をたくさん穫ること」だ。収量を減らす覚悟なら旨い米は作れる。しかし、味を落とさずに収量を上げるのはかなり難しい。

しかし、どれほどよい米を作っても認知度が上がらなければ売れない。商談会やPRには積極的に出向くが、ネット販売でより広域の販路の獲得を狙ってもいる。

とはいえ、ネット販売のむやみな安売り合戦には巻き込まれない。一番安い物は売れるが、二番目に安くても決して売れないことがわかっているからだ。

いい米を適性価格で販売するために、どんなPRをし、差別化を図ればいいのか。米作りをしながら、売り方も同時に考える。

不安を抱えつつ一歩ずつ前進する息子に、父が追い風となって、百姓屋の稲作農家のスタイルが確立される日は近そうだ。

漁業（ホタテ養殖）

大宮 俊彦さん

（32歳）

海産資源を安定供給できる
仕組みづくりに取り組みたい！

蓬田村の特産品として筆頭に挙がるホタテ。その養殖で安定収入を得ている大宮さん一家だが、元々は米作り農家だったが、いつの頃からかホタテ漁を始めた。

「当初は兼業で水揚げは年間8トン程度だったそうです」

それが現在では150トン。昭和40年代から盛んになったホタテ養殖に比重を移し、稲作を縮小した結果だ。また、以前は成貝中心に出荷されていたホタテだが、現在は半成貝が主流だという。

「成貝になるまで3年、半成貝なら2年です。成貝は育てる時間も手間もかかるけれど、半成貝は時間も手間も減らせる上、収量が多い。加工にかかる時間も少ないんです。だから、自ずと半成貝がメインになってきました」

漁業を始め第一次産業は、やり方次第。現状に甘んじることなく、常に、先々のための取り組みを考えなければならない。そこで、同じ志を持つ漁師が集まる『漁業研究会』のメンバーにもなった。

蓬田村の漁師全体で、独自の加工場を運営して、加工した商品を販売、また、輸出できないか。ホタテだけでなく、ナマコを養殖できないか。海水温の上昇に弱いホタテを守る陸上の養殖施設がつくれないか。ホタテの殻を加工してもっと活用できないか。大宮さんの頭の中ではたくさんのアイデアや構想が渦巻いている。

ホタテをできる限り確実に商品にする。ホタテに被害が出ても代替できるナマコなどの資源を持っておく。そうして資源確保をしつつ、同時に人材確保をするのが必須だと語る大宮さん。

「村には47人の漁師がいますが、その半数に跡継ぎがいません。跡継ぎがいたとしても、手伝う人間がいない。村の漁業が存続するのに足りないものは『人』です」

従来のような家族経営ではなく、生産から加工まで一貫して行う組織や仕組みをつくれば、外から人が集まるのではないか。村全体の人口減少にも胸を痛める大宮さんは、活気に溢れ、多くの子ども達の声が響く未来のために、できることを始めている。

トマト農家

石田 和則さん

（39歳）

デリケートで生産管理が難しい トマトだからこそ面白い

石田さんは蓬田村に移住した新規就農者である。現在村営住宅で暮らしながら、トマトのハウス栽培に取り組んでいる。

元々は仙台で飲食業に従事していた。しかし、２０１１年３月11日、勤めていた仙台市国分町の飲食店で被災し、壊れた店舗の仮補修を終えて営業再開した４月７日の深夜、再び被災し、「心が折れてしまった」と語る。

もう飲食業からは撤退しようと考えていた矢先、仙台で、東北数県の被災者受け入れの事業説明会が行われた。東北は前職の新店舗立ち上げなどで全県回ったが、青森の印象はあまり残っていなかった。しかし各県の説明を聞き、真っ先に心が動いたのは、青森の農業研修の説明だったという。震災後の１週間余り、商品不足の仙台のスーパーの生鮮売り場に、青森産の野菜だけは並んでいた光景を思い出したからだ。

これまでと違う形で食べ物に向き合ってみたいと就農を決めた。実家は福島の桃農家で、農業に無縁だったわけでもない。

２年の農業研修を終え、周囲の薦めもあってトマト農家を目指すことに。最初は大規模農家に、次に個人農家に１年ずつ弟子入りした後、独立。運良く蓬田村で土地が見つかり、就農した。

「先祖代々受け継いできた土地を貸していただいたわけですから、村に骨を埋める覚悟です。トマト栽培に関しては、信頼できる師匠が傍にいるし、今は『自分が食べたいと思うトマトを作りたい』気持ちでいっぱいで、不安より好奇心が勝っています」

農業を始めてから、とにかく健康になった。体重は変わらないのに体脂肪率が半分に減り、健診で20代の血流だとほめられる。「トマトが赤くなると医者が青くなるって本当ですね」と笑う。

家族を養い、村のために少しでも何か役立てれば十分幸せだと感じているが、目標もある。

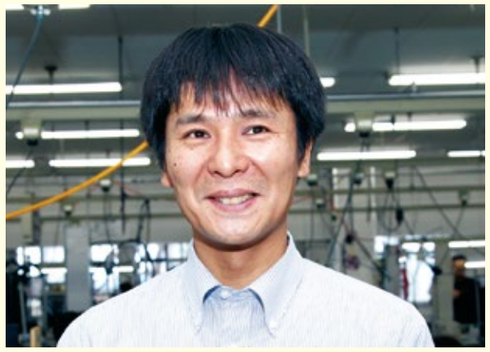
「60歳までに３００坪のハウスを管理して１００坪から1トンずつ収量を上げたい。家と墓を建ててやるって嫁と約束してるんで」

すべては家族の幸せのために。

（株）蓬田紳装

今　順 司さん

（39歳）



約40年間、楽しい時も苦しい時も 村と共に歩んできました。

２０１６年３月で創業39年目に突入した蓬田紳装。紳士服のイージーオーダーに関しては全国一、二を争う技術を誇り、首都圏の老舗百貨店や政財界、芸能界からの依頼が後を絶たない縫製工場である。工場長を務める今さんの目下の悩みは『人材不足』。２２０余名の従業員ではこなしきれない数の依頼があるからだ。

「イージーオーダーの鉄則は、徹底した品質管理と納期管理です。その基本を押さえなければ一流の相手から評価されません」

15年前、老舗百貨店との契約が成立するまで、試作品の駄目出しが2年近く続いた経験がある。品質と納期のいずれかが不完全でも許されない厳しさを思い知った。以来、完璧な条件で納品できる保証がなければ、受注は受けない。その姿勢で実績と信頼を築き上げてきた。だからこそ、事業拡大には有能な人材、人力が必須なのである。

創業前、村の若い女性50名程を旧広瀬小学校に集め、買い揃えた中古ミシンを使って技術指導を始めた。そもそもが、村に『雇用』を生むために誘致した縫製工場である。38年間、「心を込めてミシンを踏み、いい服を作り続けた」結果、縫製業界で高評価を得る技術者集団に成長した。

２０１５年冬に放送された高視聴率ドラマの主人公が、蓬田紳装製のスーツを劇中で何点か着用したことが話題となった。実は、あまりに仕立てが良過ぎて、主人公の設定に不釣り合いなので、敢えてしわくちゃにしてから着たというエピソードがある。

人をきちんと扱えない会社はいい物を作れない。財産は『人』という理念を貫く蓬田紳装。

現在、従業員の約１００名が村内から、残りは近隣地域から通っている。大半が女性のため、冬の運転を憂慮し、バス４台で送迎しているという。また、工場の２階には社員食堂も設けられている。

福利厚生も充実した環境で、65歳の定年を迎えた後でも再雇用で70歳まで働けるという制度がある。そのような職場は、昨今貴重である。中には、59歳で入社し働く社員もいる。経験がなくても仕事に対し真摯であれば年齢は問わない。

「村の支援を受けて設立した工場だから、何があっても生き残らねば」と幾多の試練を乗り越えて、県内屈指の優良企業となった。今後さらなる発展のために、意欲的な人材を募集中である。

トマト加工

藤田 かち子さん

（67歳）

蓬田にトマトケチャップ製造を根づかせる夢を抱き続けて

藤田さんは、平成13年に結成した「蓬田トマト加工グループ」代表として、蓬田村産トマトを使用したケチャップやソース、ジャムの加工に取り組んでいる。

平成7年から、農家の主婦22名で運営する直売所の代表を務めていた藤田さん。販売する加工品の品揃えを増やすため、廃棄される規格外のトマトで何か作れないかと当時の「農業改良普及センター（現在の県民局地域農林水産部農業普及振興室）」に相談したことがある。その際、技術指導を受けた加工品の一つがケチャップだった。

製造作業は確かに大変そうだが、これなら傷ついたトマトにも付加価値がつけられる。一緒に作ろうという藤田さんの呼びかけに応えた3人と共に製造を始めることを決意。ちょうど「よもぎた物産館マルシェよもぎた」がオープンし、製造したケチャップはそこで販売してもらうことになった。

とはいえ、トマトを保管する冷凍庫はおろか加工場もない状態からのスタートである。

「往復3時間をかけて、県の施設に何度も何度も試作に通いました。ケチャップそのものはもちろん、瓶選びも、ラベル作りも、何もかもが初めてで大変だったけど、いい物が作れるという自信も情熱もあった。世間知らずだっただけかもしれませんけど」

試行錯誤の末、翌平成14年に商品化にこぎつけた。精力的にイベントや商談会に参加してPRし、売り上げは右肩上がりに。しかし、少数精鋭のグループ（現在5名）ゆえ、最近は少し息切れ気味かも、と藤田さんは苦笑する。

「自分も他のメンバーも農業と主婦業を併行しながらの加工業だし、年も取っていきます。早く後継者を見つけてノウハウを教えたい。私達だけが作って終わるのではなく、蓬田村にケチャップ製造を定着させるのが、最初から変わらない私の夢なんです」

村の駅よもっと

武井 大介さん

（34歳）

鮮度抜群の魚介と野菜を揃え、地域の食生活を支える誇り

生まれ育った蓬田村で、自宅から通勤時間5分のこの施設で働き始めて8年という武井さん。

「魚が好きなので、毎日魚に関われるこの仕事は楽しいですよ。家から近いから、冬でも天候に振り回されずに出勤できるし」

青森市内に住んだこともあるが、やはり蓬田村が住みやすいと戻って来た。「海も山も近くて、夏も涼しくて、これでヤマセがなければ最高だけど」と笑う。

武井さんの勤務する『村の駅よもっと』では契約農家の野菜や蓬田や外ヶ浜で水揚げされた魚介を仕入れて販売しているが、食材の鮮度と品質には自信があると胸を張る。特徴的なのは魚介販売コーナーにある大きな生簀だ。

「活魚を扱っているのを知って、青森市内の飲食店の方もわざわざ買いに来てくれるんです。だから、たとえば帆立の成貝の場合、水槽の設備のあるトラックで活きたまま搬入してくれる漁師さんから購入すると決めています。運搬中に風にさらされると帆立が死んでしまうんですよ」

お客様のニーズに応えるため、仕入れ先にこだわる。魚の目利きが武井さんの仕事だ。魚介のみならず、野菜も「新鮮で安い」という評判を聞きつけ、村外から買いに来る人達が多い。その期待に応えるのはやり甲斐の一つ。

しかし、何といってもメインのお客様は、徒歩圏内の地域住民。朝8時から夕方6時まで、正月三ヶ日以外は休み無しで営業し、顔見知りも多い蓬田村の人々の食生活を支えている自負がある。買い物のついでに、村民同士が会話も楽しむ交流の場でもある。

働き甲斐のある職場で不満はないが、望みが一つある。

「一緒に働いてくれる若い人が増えるとうれしいですね」

ようこそ
私たちの
蓬田村へ

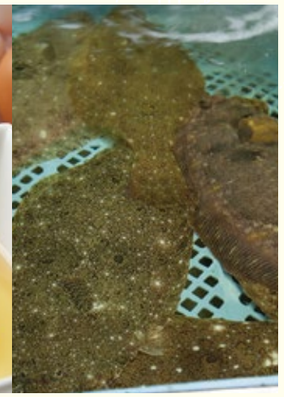
未来へ向かって
蓬田村の基本構想

**蓬田村に住む全ての人たちが幸せになれる未来を
つくっていきたい**

基本目標と
将来像

豊かな自然と共生する
活力みなぎる村

- 緑豊かな快適な村づくり
- 健やかでふれあいのある村づくり
- はつらつとした創造性豊かな人づくり
- 活力ある産業の村づくり



蓬田村の宝もの

蓬田村の名産品

陸奥湾の穏やかさを生かして始めた養殖のホタテや、ブランド野菜として脚光を浴びる良質トマト、先人達の努力の結晶といえる美味しい米、安心安全な卵、また、それらを使った加工品など、村には、自信を持って全国に発信できる優れた産品が揃っています。

よもぎた物産館マルシェよもぎた

東津軽郡蓬田村大字郷沢字浜田地内
- 電話／0174-31-3040
- 定休日／無休（正月1、2、3日は休み）
- 営業時間／8:00～18:00（5月～10月）、9:00～17:00（11月～4月）

村の駅よもっと

東津軽郡蓬田村大字阿弥陀川字汐干106
- 電話／0174-31-3115
- 定休日／無休（正月1、2、3日は休み）
- 営業時間／8:00～18:00

トマトケチャップ
トマト栽培農家が自ら加工して作ったケチャップです。完熟トマトを贅沢に使用しています。

トマトソース（各種）
いろいろな料理に使えるソースです。もちろん手作り、料理に合わせてお選びください。

トマト（各種）
村自慢の大玉トマト「桃太郎」はもちろん、甘さや食感が特徴的な「ベビーベビー」も評判の一品。

ほたて
大きなほたて貝に、味噌とほたてと卵を入れた貝焼き味噌は今も変わらない郷土料理。

卵
青森のお米で育った鶏から生まれた卵や、採卵期間を限定した卵、ひと味もふた味も違います。

手作り 大きなおにぎり
よもっとの隠れた名物。10cmを越す大きさ。梅干し、鮭、たらこ、筋子、焼き味噌の５種類があり大人気です。

フライまんじゅう
中に餡が入っている丸いあんドーナツ。外はカリカリ、中はしっとり。あまりの人気にお昼前に売り切れることも。

蓬田米 うちの田んぼの米
じっくりと手間ひまかけたお米です。蓬田村の農家の愛情と心意気がギュッと詰まったお米です。

トゲクリガニ
青森県の桜の時期に旬を迎えることから、「花見ガニ」「桜ガニ」とも呼ばれ、甘く、濃厚な味わいのカニ味噌、メスの卵は絶品。

北のよもぎ茶
柔らかいうちに摘んだよもぎの葉と、玄米でつくったお茶です。胃に優しい健康茶です。

焼き干し
添加物を一切使わない、今でもほとんど手作業で作っている逸品。臭みがなく上品な味わいのだしが取れます。

なまこ
青森県のお正月料理に欠かせない陸奥湾の珍味。そのコリコリした歯ごたえは絶品です。

未来へ向かって

緑豊かな快適な村づくり

エコ&リサイクルの精神で自然環境を守り、災害に備えて快適で安全な暮らしを

村の総面積の約8割を占める森林は、水資源のかん養、水質や地球環境の浄化、山崩れ防止などの役割を果たし、野生動植物の宝庫でもあります。環境に負荷をかけないように伐採を行い、併行して間伐や植林を行うことで、自然環境及び、良質木材の資源としての保全に努めています。

その豊かな緑に囲まれ、海岸沿いに伸びる幅約5キロの緩やかな傾斜地が耕作地と宅地です。その間を南北に貫くJR津軽線と国道280号バイパス沿いという利便性の高いエリアに、現代のライフスタイルに適応したオール電化の村営住宅39戸が完成しました。子ども達が安心して遊べる広場なども整備予定で、村の新たなコミュニティ空間となる団地です。（28年度末50戸完成予定）

村では、快適な生活環境実現のため、ホタテ貝残渣による海水の汚濁対策、ごみの不法投棄などへの対策を次々と進めてきました。また、農業、漁業、観光の資源である自然環境や景観を守り、限りある資源を有効活用するため、清掃活動や廃品回収が住民主導で行われています。

こうした住民の連帯感を防災にも生かし、火災、また、地震や台風などの自然災害発生時の自主防災組織の育成を図り、連携・協力体制づくりを進め、情報の早期提供に努めます。

●村営住宅

村営・よもっと団地は、平成28年3月までで39戸が完成しました。オール電化で、1LDK、2LDK、高齢者・身障者向け2LDKの3タイプ。国道280号線沿いにあり、JR蓬田駅、蓬田小学校にも近い便利な立地です。広場や集会場もあり、子どもからお年寄りまで快適な住環境となっています。

●太陽光発電

東日本大震災を契機に国が推進する「防災拠点等公共施設への再生可能エネルギー等導入推進事業」にのっとり、平成28年2月、蓬田中学校に太陽光発電を設置しました。自立・分散型エネルギーの導入により、『災害に強く、環境負荷の小さい、エコで省エネな地域づくり』を目指します。

●消防団

「村の消防団」は「青森地域広域事務組合」と連携し、火災や自然災害から村民の生命や財産を守っています。各地区に配置された消防8分団は主に住民によって構成され、高齢者世帯などの状況も把握している心強い存在。しかし、団員数は年々減少傾向にあり、現在も団員を募集中です。

●玉松清掃活動

夏の観光シーズン本番を前にした7月、蓬田小・中学校の生徒、赤十字奉仕団、徳誠園、高齢者の方々の協力を得て、ゴミ拾いや草刈りといった清掃活動を行っています。清掃地域は玉松海水浴場、玉松台場、古城の沼周辺、中沢、蓬田、瀬辺地の各駅。また、漁業関係者は村内の海岸の清掃活動を行います。

●廃品回収

毎年4月と11月、各自治会の子ども会と自治会が協力し、廃品回収活動を行っています。回収は朝8時からスタート。各家の前に出された古新聞や雑誌、空ビン等を集めて回り、ふるさと総合センター駐車場に運びます。資源はまとめて再資源化のために回収業者に渡し、収益は子ども会の活動費用に充てられます。

●ホタテ残渣堆肥化処理施設

ホタテの養殖かごについた貝類などの残渣（ざんさ）を資源として再生・循環させる施設が、平成27年6月に完成しました。残渣に鶏ふんやもみ殻などを混ぜ、発酵させて肥料にし、農家に無料配布しています。循環型の処理方法の構築に向けた取り組みは県内の漁業関係者から注目を集めています。

漁業協同組合　中川 貴世仁 さん

ホタテ養殖漁業は日々進歩し、未来へ続いていく── 未来に寄せて

ホタテの養殖かごに付着した雑貝や海草などを発酵させ堆肥にする「ホタテ残渣堆肥化処理施設」が2015年に完成しました。これまで処理に苦労してきた残渣から作られる堆肥は、村の農業発展に繋がると思います。このようにホタテの養殖技術は日々進歩し、様々な問題を克服しています。

また、むつ湾産「ベビーホタテ」は、他の産地では真似することができない商品として既にブランド価値が認められ、今後も安定した価格が見込まれています。今後、少子高齢化により生産量を維持するのが困難になっていくと思われますが、村にいる後継者達が胸を張ってホタテ養殖漁業を続けていける体制作りを続けていきます。ホタテ養殖漁業は村の基幹産業として生き残っていけると確信しています。

未来へ向かって
健やかで ふれあいのある村づくり

子育て中のお母さん、高齢者、障がい者。だれもが明るい笑顔で暮らせる村に

少子化が進む村では、育児経験のない母親が気軽に相談できる相手がおらず、不安を抱えているケースがあります。そこで、乳幼児を持つ母親の有志がサークルを結成。情報交換や共有をしながら交流し、健全な子育てをしています。

村では、多様な保育ニーズに応えるために蓬田保育園を民営化。また、各種健診の実施のほか、0歳から15歳までの医療費（入院・通院）を助成し、子育て世帯の負担軽減に努めています。

成人に対しては、健やかで明るい高齢期に向け、中高年期から「自分の健康は自分で守る」という自覚と認識を促すため、住民健康診査を行っています。平成26年の健（検）診では、三大生活習慣病に関して要指導、要治療と診断された人が38％という結果で、生活習慣の改善が強く望まれる状況でした。

活動的な高齢者に対しては、働きやすい就業の場の創出、スポーツやレクリエーションを通じた交流の促進、経験や知識、技能を生かしたボランティア活動の推進など、社会参加の機会を提供し、介助を必要とする高齢者には保健・医療・福祉の包括ケアの推進、在宅福祉サービスや介護保険の充実に努めます。

また、障がい者が地域社会の一員として安心して暮らせる環境づくり、バリアフリーの村づくりも課題です。

●乳幼児健康診断

3歳児健診、就学時健康診断など、子どもたちを対象とした健康診断は、ふるさと総合センターを会場として行っています。歯科、内科、視力、聴力検査、問診を行う健診のほかに、時には母親向けに、食生活改善推進員による「だし活講座」などの食育講座も併催し、子どもたちの健康増進の啓蒙に努めています。

●住民健（検）診

平成20年3月に「特定健康診査等実施計画」を策定し、国民健康保険者のうち40歳以上75歳未満の方を対象に特定健康診査を実施しています。審査結果により、必要に応じて特定保健指導を行い、生活習慣病の予防、早期発見、早期治療に取り組み、中高年の住民の健康保持に努めています。

●介護保険サービス

村内の介護保険制度関連施設は、指定介護老人福祉施設「蓬生園」、デイサービスセンター「よもぎケアセンター」、「蓬田村社協指定居宅介護支援事業所」、グループホーム「グループホーム逢々」「玉松ホーム」「グループホームよもぎた」「有料老人ホームよもぎた」の7ヵ所でサービスの向上に努めています。

●子育てサークル

「プレイランドスマイル」は、母親同士の交流を深め、育児中の孤立化を防ぐ目的で結成されたサークルです。育児教室や、子育ての悩みや不安にアドバイスする『子育てサポーター』による相談受付、託児つきの料理教室など、心のケアからリフレッシュの時間の提供まで多様なサポートが好評です。

●老人スポーツ大会

毎年6月に開催される恒例行事で、開催回数はすでに30回以上。村内8つの老連合会員百数十名が農業者トレーニングセンターに集合し、ボール送り競争や缶釣り競争などに参加して、チームや個人で競い合います。仲間のはつらつとした姿に声援を送り、会場には爽やかな笑顔と笑い声があふれます。

●社会福祉大会

ふるさと総合センターで開催される「蓬田村社会福祉大会」では、永年にわたり社会福祉協議会役員、民生委員児童委員、福祉団体の役員として功績のあった方々に表彰状が贈られます。また年ごとに趣向を変えて、警察官による寸劇や保育園児の演奏、老人クラブの踊りなども行われます。

（左）中川さん（右）佐井さん

子育て支援コーディネーター 中川めぐみさん　佐井 靖子さん

子育て世代のための仲間作りの場所を ―――― 未来に寄せて

子育ての楽しみ、悩みや苦労を分かち合いたい、それが子育てサークルを始めたきっかけです。今では年間通じていろいろなイベントを行っています。クリスマスや餅つき、豆まき、中にはおさがり交換会やお母さん向けの料理教室なんかもあります。妊婦さんでも参加OKです。

以前では近所に子育てをしている仲間がいなければ寂しい思いをしたのですが、このサークルを通じて悩みや不安などを共有できればと思います。蓬田村は子育てするには良い環境だと思います。お母さん同士は顔見知りで、お互いに声を掛け合いますし、子ども同士の仲も良好です。

これからもお母さんと子どもたちが安心して過ごせる居場所として、みんなで賑やかに助け合って活動していきたいです。

未来へ向かって

はつらつとした創造性豊かな人づくり

村の魅力、先人の知恵。地域力を注いで育む『人間力』の高い人材

村にある保育園、小学校、中学校の各施設に通う子どもたちの数は年々減少しています。しかし、この少人数の環境を生かし、村では一人一人に十分な教育が行き届くよう、さまざまな施策を進めて来ました。

幼児期には調和のとれた心身の発達を促し、情操や自立心を育むことが重要です。保育園では、それぞれの個性を伸ばす、きめ細やかな指導を行えるよう、園を民営化しました。園では、少子化や核家族化によって家庭では体験できないことを地域社会との関わりの中で学び、育む取り組みも積極的に行い、しつけや道徳教育の面でも成果をあげているようです。

小・中学校では、画一的ではなく、個々の能力や個性に応じた指導を一貫して行っており、国際化社会や情報化社会への対応として、ALTによる英語教育の充実やコンピューターの導入を行っています。また、子ども達にたくましく生きる力を身につけさせるキャリア教育として、校外へ飛び出しての活動にも力を入れています。村の自然や歴史、伝統、産業、人々について学び、体験する、社会奉仕活動で地域に関わる、職場体験を通じて実社会に一歩踏み出す、海外で異文化にふれるなど、郷土への誇りと広い視野を育む場を提供しています。

●ブルーベリー獲り体験

森秀夫さん所有のブルーベリー畑（長科）で、毎夏、蓬田保育園の園児たちがブルーベリー摘みをしています。森さんの招待で平成18年から始まった収穫体験で、園児たちは、10種類のブルーベリー約800本が植えられた畑で、歓声を上げながら実を摘み、その場で新鮮な果実を味わって楽しんでいます。

●子ども会リーダー研修会

夏休み期間中に2日間にわたって行われる蓬田村子ども会リーダー研修会。毎回、10数名の小学生が参加し、玉松台スポーツガーデンにテントを張ってキャンプをします。黒滝散策などの野外活動や、発明教室、野外炊事など、日常の生活では得がたい経験を通じ、成長できる機会になっています。

●中学生の海外研修

平成23年度から、蓬田中学校の3年生を対象として、英語力の向上や、異文化体験を通して国際社会で通用する人間力を身につける目的で、3泊4日程度の海外研修を行っています。これまで、台湾、シンガポールなどに出かけており、研修費は子ども達の未来への投資として全額村が負担しています。

●介護施設訪問

蓬田保育園の園児、蓬田小・中学校の児童、生徒は・毎年、指定介護老人福祉施設「蓬生園」を訪問し、遊戯や歌、唱歌の合唱を披露しています。普段は静かな施設が、子どもたちの訪問でにぎやかになり、入所者は思わず笑顔に。中学生とは地域の話で盛り上がるなど、楽しい交流のひとときを過ごしています。

●小学生農業体験

蓬田小学校5・6年生は、下山嘉幸さんの水田（長科）を借りた「ぼくらの学校田」で、毎春、手植えでの田植え実習を行っています。また、稲刈りや昔ながらの脱穀作業も体験。3・4年生は農協のトマト育苗センターで接ぎ木作業を体験するなど、村を支える農業の歴史や大切さを学んでいます。

●中学生職業体験

蓬田中学校の1・2年生を対象に、毎年実施される職業体験学習。2年生は青森市内、1年生は村内の事業所で実際に仕事をして、働く事の意義、社会生活のルールやマナーを学習します。これまで、蓬田漁港の作業、村役場の窓口、保育士、販売店のレジなど、さまざまな職種を体験しています。

英会話講師 メリッサ・ペイヴィー さん

英語を利用して世界を広げよう ―――― 未来に寄せて

小・中学校の語学指導助手としてこの村に来て5年。日本に残り村で結婚して、今は青森市内の英会話教室の講師をしています。小・中学校で子どもたちに英語を教えるのは楽しかったです。逆に給食や日直のことを教えてもらったりして。

子どもたちには英語で話すことを怖がったりせず、どんどん外国に行って夢を持ってほしいです。留学するのも良いかもしれません。外国の文化に触れることで、この村の良さを再発見できると思います。

私はアメリカからこの村に来て、温かい地域のみなさんと豊かな自然に囲まれ、毎日の生活を満喫しています。海も山も大好きです。家の窓から海が見えるのは贅沢ですね（笑）

未来へ向かって

活力ある産業の村づくり

農水産物の高付加価値化と、観光ルートの確立で、村にさらなるにぎわいを

村の基幹産業である農業、漁業は、ともに高齢化や後継者不足により生産者の数が減少傾向にあり、担い手の育成とともに、より効率のよい農法、漁法の確立が進められています。

農業においては、有機栽培や減農薬栽培を基本とした「安全・安心な産品づくり」を目指し、堆肥センターを核とした土作りに重点をおいた「地域循環型農業」を推進しており、同時に「よもぎたトマト4姉妹」など、農産物のブランド化により、競争力のある産地形成に努めています。また、農業経営の合理化、省力化のため、主力産品である水稲に関し、ライスセンターを核とした地域営農集団の育成強化や農作業の受委託の促進が図られ、成果も上がりつつあります。

漁業は、ホタテ貝養殖を中心とする「つくり育てる漁業」「資源管理型漁業」を推進しており、陸奥湾の汚濁防止、林業者と連携した植林による豊かな海の維持に取り組んでいます。

これら産品は、よもぎた物産館「マルシェよもぎた」や村の駅「よもっと」の産直施設において販売されて認知度が高まり、加工品のヒット商品も生まれました。

また、産直施設を始め、各種レクリエーション施設は、北海道新幹線開業後の観光スポットとして集客に期待がもてます。

●農業協同組合

平成28年1月、トマト部会の30周年記念式典が行われました。水稲育苗ハウスの後作として始まったトマト栽培は、いまや県内一の品質を誇り、米とともに村の主力農産物になりました。大手ファストフード店への供給で全国区になった桃太郎トマトを筆頭に「安全・安心」な野菜の生産・出荷を支えています。

●漁業協同組合

平成28年2月現在、組合員は74名（内ホタテ養殖漁業者47名）。平均年齢47歳で、最年少は30歳、最高齢87歳。水揚げ金額の9割を占めるのはホタテ（5月～ 8月が出荷時期）で、残り1割はナマコ（3月と12月が漁期）。「漁業研究会」会員12名がホタテ養殖の技術研究やナマコ天然採苗試験を続けています。

●商工会議所

村内を中心とした中小企業・小規模事業者、約70社で編成されています。内部組織として、若手後継者等で構成されている青年部、会員の配偶者等で構成されている女性部などがあり、地域活性を目的とした地元イベントの企画・開催、近隣イベントへの参画を積極的に行っています。

●養鶏

鶏卵の農業産出額は青森県内では第5位（平成22年）となっており、緩やかではありますが増加傾向にあります。蓬田村でも鶏卵は力を入れている産業で、村の卵を使ったロールケーキや卵かけご飯、水質の良さを活かしたより濃厚な黄身の卵など新たなブランド品としてを販売しています。

●流しトマト

ブランドトマトをPRする「トマトマルシェ」というイベントの一環で、平成27年夏季、マルシェよもぎたで世界初の「流しトマト」が行われました。約4メートルの高さから全長約30mを水流に乗って流れてくるミニトマトを箸やお玉でキャッチする楽しい企画は、子どもにも大人にも大好評でした。

●海まつり（ホタテ振る舞い）

毎年8月の第1日曜日に、玉松海水浴場で開催される「海まつり」は、宝探しゲーム、爆弾ゲーム、浮き輪手こぎゲームなど、参加型の楽しい企画が盛り沢山のイベントです。獲れ立ての新鮮なホタテの貝焼きの振る舞いや、豪華景品のプレゼントなどもあり、村内外からの参加者でにぎわいます。

農事組合法人 蓬田養鶏組合 工藤　晃さん

安心を村民の食卓へ ―― 未来に寄せて

蓬田養鶏組合は祖父が昭和48年にこの村で養鶏業を始めたのがルーツです。今日まで、たまごひとすじ40数年、近代養鶏の大量生産方式には目を向けず、村の自然環境を生かしつつ、鶏の飼育環境を重視した昔ながらの養鶏法を貫いています。私の理念は「おいしい卵を安全に供給する」ということ。卵には代替品は存在しませんし、日本では安くて美味しい卵が当たり前。徹底した衛生管理で安心を食卓に届けたいです。また鶏糞は堆肥として利用され、農業・環境に一役買っている面もあります。

今養鶏は村にとっても大事な産業の一つになりました。一見地味に見えますが、東北6県の中で青森県は鶏卵生産量が一番なのです。これからもこの村で根を張って頑張っていきます。

行政・議会

村民、民間、行政が一致団結してアイデアを出し合いアクティブに対応することが蓬田村の総合戦略です

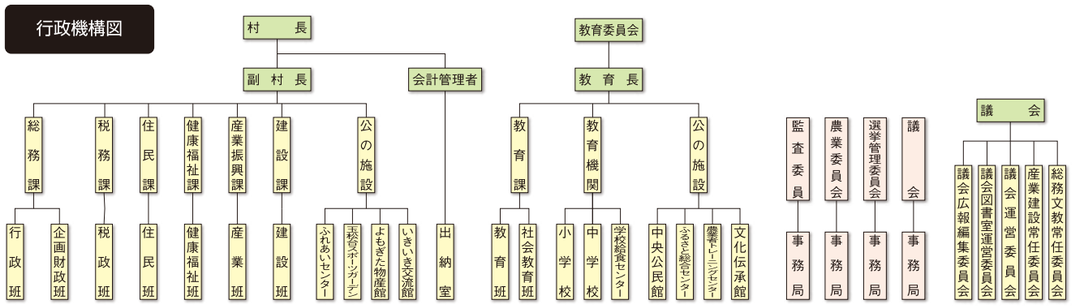
平成28年にまち・ひと・しごと創生蓬田村総合戦略を策定しました。

地域の自主性及び主体性、並びに地域実状に沿った地域性の3点を発揮することが、地方創生には求められます。そのためには、村民や民間事業者をはじめ、教育機関、地方金融機関など地域にかかわる多様な主体が総合戦略を共有し、それぞれの役割の下で総合戦略を実行に移すことが必要です。なかでも、地域を担う主体として大きな役割を有しているのが、村民や民間事業者の方々です。また、地域の産業振興として既存産業を強化したり、新たな仕事を創出したりするには、これまでの慣習にとらわれず、競争や失敗を恐れずに動き出そうとする熱意ある民間事業者の存在が不可欠となります。

そのうえで行政は、自主性と主体性を発揮した村民や民間事業者が活動しやすい仕組みづくりと、そうした取り組みに重点を置いた支援策を講じて地域性を発揮させることにあると考えています。

蓬田村の魅力は「人情に厚く昔ながらの地域間の助け合いがあること」「豊かな自然と新鮮で美味しい山海の幸に恵まれていること」でしょう。これらを守りながら、基幹産業である農業や漁業をさらに元気にし、国際化に対応できる振興策を立て、未来へ向けた取り組みへ挑戦していかなければなりません。これからはさらに、宅地開発による都市近郊型農村社会の創造実現を目指し、「ふるさとにしたい村づくり」を目指していきます。

行政機構図



長としての責任を受け止め村民の幸せのために

教育長　吉﨑 博　　蓬田村長　久慈　修一

村議会議員（2016年3月現在）

村議会議長 藤田修一　副議長 久慈省悟　議員 木村 修　議員 坂本 豊　議員 柿﨑裕二　議員 小鹿重一　議員 森 弘美

村章（昭和55年7月1日制定）

蓬田村の頭文字「ヨ」の字を図案化したもので、三本の尖った線とし、一番下は過去（祖先）、中は現在、上の長い線は未来（青少年）を意味し、限りなき発展と松葉のごとく強健にして融和と団結を表現したものです。

村の花「ハマナス」
【バラ科】本州北部・北海道の海岸に群生する。落葉低木で枝は太くとげがある。葉は羽状複葉。6、7月ごろ、枝頂きに径約7cmの紅色の五弁花をつける。

村の鳥「オオハクチョウ」
【カモ目カモ科】翼を広げると2mを越し、身体は純白で脚は黒。くちばしは黒く、付け根が黄色。日本には冬鳥として渡来する。

村の木「クロマツ」
【マツ科】常緑高木。海岸に多く、樹皮は黒褐色。針葉が2本ずつつき、長くて堅い。全体に剛強なので雄松（おまつ）ともいう。